

相當後期に屬するものとせざるを得ない。

湖面には十二の化佛と散華とがあり、上空遙かに彩雲の中に行基尊の淨土の寶殿が現はれてゐる。

本圖の傳來は明かでない。知恩院史編纂所の調査によれば寺傳に或は後奈良天皇御臨終に際して當院第廿五世超譽存牛上人本圖を掲げ奉つたと云ひ、或は又桂昌院が本院に寄進せるものと傳へるといふ。しかも住吉内記の寺社寶物展覧目錄にも洩れたるは遺憾である。(渡邊)

### 三、扇面古寫經

滋賀縣 西教寺藏

幅仕立扇面 紙本靑彩

堅一九・五寸 上弧弦四九・六寸  
下弧弦 一八・九寸

扇面形の烏ノ子様の料紙に、雲母を置き、その上に金銀の禾、切箔を一面に蒔いて、下繪を描いてゐる。圖には見られる如く、烏帽子、直衣の殿上人が二人、殿舎の端の簀子の上に對座し、高杯を狹んで、何ごとかもの語りしてゐる。背景をなす殿舎の庭前に、漣の起伏の見えるは泉殿などの一角を表はした狀景であらうか。軒に吊す簾の風に搖れるさまより、いづれ夏の日の涼を求むる殿上人の靜かな生活の一面、經典の内容とは全く關係のない當時の貴紳の風俗を描寫したものである。人物の描法は當代通途の引目鉤鼻の様式をもち、衣紋其他の描線は何れも纖細流麗な墨線を自由に馳使してゐる。彩色はかなり剝落してゐるが、その殘存の部分に就いてみるに、縁がかつた濃黄色の扇を持つ男の衣は綠地に藍色の文様、それに對する男の上衣は白地に黃褐色の文様を入れ、袴は淡綠の地に淡墨の文様が描かれてある。庭前の水波は墨味勝の淡綠の地にほのかに白縁にて水脈を描起してゐる。且また簾は薄綠の地に淡墨にて割竹の目を入れ、縁取は濃綠にて、垂れ糸は朱にて彩られてゐるなどすべて、もとこれ鮮麗雅美を誇つた賦彩の跡が残されて、裝飾的優雅な上に清爽な趣さへ漂うてゐるものである。而して寫經文はこの下繪の圖様に何等泥むところなく、妙法蓮華經卷第一、方便品第二中「無上兩足尊」より「則生大歡喜」に至る五

言偈文を四句一行にて四行に、「爾時世尊」より「欲生衆生」迄の長行を十七字詰二十行に、當代寫經體の溫籍たる書風をもて墨書し、下繪の烏帽子や高杯の脚の如く墨色の部分と重り合ふ箇所には金泥を用ひて書して、下繪の彩色と相俟つて莊嚴の効果を高めてゐる。

この扇面古寫經は、もと四天王寺に寄進された法華本經八卷並に開結二經二卷具備してゐたものが、夙に散逸して、今その最も多數を所藏せる四天王寺(法華經序品殘缺六、如來壽品第十六より妙音菩薩品第二十四に至る九品、無量義經表紙共十二枚、觀音賢經表紙共九枚)の五十一葉の外に、東京帝室博物館(法華經卷第八、帖裝一帖完)男爵益田孝氏(同序品一面)久原文庫(觀音賢經一葉)法隆寺(同上的一面)及び茲に收載せる西教寺の一面が現存のすべてである。何れも其の形態は素より、寫經の書體、下繪及び金銀切箔等の莊嚴法を等しくし、すべて中央堅に摺折の跡あるは、もとこれ帝室博物館藏の粘葉綴の如く帖仕立になつてゐたものと思はれる。是等の中で四天王寺の大部分及び久原文庫の一葉には背面の寫經面を併存してゐるのであるが、この西教寺の一面は益田家及び法隆寺の各一面と共に、彩色下繪を有する面のみを掛幅裝として保存されてゐるものである。

扱てこの扇面古寫經は寫經の書體と下繪の様式とより推して、藤原末期の絢爛たる文化の反映した一遺品としてみるべきものであらう。因にこの筥蓋表に「聖德太子震<sup>(イ)</sup>翰 無上兩足尊一幅」とあり、同裏に「西教寺常住物 三十二世眞全上人遺品豫約寄附」と墨書されており、尙、「小野木工頭道風無上兩足尊古代之扇子同時の古畫名筆稀也」と云ふ極書を伴うてゐる。(菅沼)

### 四、單庵筆 五位鸞圖

東京 帝室博物館藏

挂幅 紙本墨畫 堅三二・九寸 横四九・一寸

單庵智傳は、その畫蹟として五位鸞圖二、一は圖掲のもの、他はボストン美術館藏幅を標準作として知らるゝ畫家である。其の傳は斷片的であつて、要するに此等の畫蹟に據つてその存在を確認せられる。

現在知られた傳の最も根本的な意味に於て重要なものは等伯畫說(本誌第一號所掲校刊)である。

一 相阿彌カ弟子ニ智傳ト云アリキ本願寺ノ(一)上人扶持セリ(三)事ニテ廿五六ニテ喧嘩ノ死一段器用ナ筆也」此人ハ尼崎ノ器繪カキノ子也即智傳モ器物ノエ書也」相見テ所望ノ弟子トセリ此者相阿ヘ行時親ニ云ヤウ」長ひつゝツサシテ可給候繪本ヲ可入ト初ヨリ名人覺悟也」

(註一) 「十三日」或ハ「十三代」と讀みうるとせられるが、いづれとしても猶ほ後考を要し、又必しも字數を三字と決定し難い。

(註二) 「別道」との讀方があるが、「若道」となす説もあつて一解釋と思はれる。

之に依り大體の輪廓を知り得るが、本朝畫史には

單庵智傳。學ニ牧溪玉磬。其墨戲能用ニ藁筆。大抵似ニ真相。其源出自周文。或云相國寺僧也。

と見え、この所説は可成に批評的であり、おそらくその技術的方面に言及する點等より見れば、單に傳に非して畫蹟からの歸納とすべきものがある。大まかに牧溪、玉磬、真相、周文を前提してその畫風を規定する。この點は等伯畫說と抵觸するものではないが、相國寺僧也とするは之のみであり、大體に等伯畫說とは史料系統を異にし、而かも相並ぶ位置を與へられる。

(註) 相國寺僧よりして禪僧と解すれば聖一國師年譜助緣人名(佛教全書同上二一頁)中、西堂に智傳と見え參考せらるゝが岐陽方秀、大愚性智、桂林明識、明叔玄晴等と並記せらるゝもので時代は茲に云ふよりは古く同名異人となる。

その他には普巖宗賢所錄の畫傳(後素談叢卷二所出)に

智傳號ニ單庵。住ニ尼崎如來院。畫學ニ雪舟。或稱ニ等譽。(藝苑叢書同上六一頁)

(註) 群芳清玩第六古畫奇蹟集に宗舜記として所掲の畫傳は全く之と同一であり宗賢記の謬かと推せられる。

と見え、之に就き後素談叢の主人公前田香雪は、雪舟の畫風を襲へる等譽は雲谷等譽にして等顏に學べるものなり。智傳單庵とは別人とするに是も異説なりと評する。

等譽に就いては、菅原洞齋の畫師姓名冠字類抄(帝國圖書館本)に等譽 號單庵ト亦知傳ト云。學雪舟ヲ繪モ能似。堺安養寺之住僧長老也。淨土宗也。亦曰住尼崎之如來院。

と圖繪寶鑑(原本未知)より所引の記述があつて、宗賢畫傳と同系と思はれる説である。更に本朝畫史によれば雪舟派に次記の畫人を見る。

等譽 專念宗之僧。居ニ泉州堺津安養寺。或云又居尼崎如來院。學ニ雪舟。畫ニ鍾馗并雜圖。得ニ其名。

(註) 或云云々の註は流布本になく古畫備考所錄(卷中七二四頁)に依る。

後素談叢に雲谷等譽として單庵より區別するを通説と謂ふが、夫が同派等益の子等與(古畫備考卷中八九五頁參照)を意味するならば、又等顏下の人とするならば時代に於て混同し得ない。即ち雪舟下のこの等譽を以て單庵智傳との關係を考ふべきであらう。既に畫史に於てはかく單庵と等譽と別人として整理し、等譽の記述が圖繪寶鑑と大體に一致し而かも單庵との名稱の記述に於て全く滅却してゐるのを見る。

要約すれば第一等伯説、第二畫史説、第三宗賢説となり第三者が殊にエクセントリックな内容をもつが、その等譽同一人説に對しては等伯説は無關心であり、畫史説は反對、圖繪寶鑑説が左袒する事となる。

單庵が尼崎の人としては、第一、第二より認められ如來院住、本願寺關係よりありうべき事である。而してこの共通な淨土宗關係は號等譽を混同なりとせばその媒介となれるものであらう。圖繪寶鑑説に等譽を堺安養寺之住僧長老とするは等伯説の單庵天死と明に扞格する。私見を挾めば、單庵は尼崎の出たる處に如來院關係を認めその畫系を相阿に即し、等譽を安養寺僧或は如來院住と考へ雪舟派畫手と解したい。單庵の相國寺住とするは雪舟との關係を想はせるものの、相阿關係よりも可能なるべく、大體にその畫風より雪舟系とするよりは相阿系とするを妥當と思はれる。現在畫格よりして不安定な名稱に過ぎざる「等譽」に顧慮すべきを見ない。今圖掲する款識「單庵筆」印「智傳」に據つて一個面目明なる畫家を樹てて、等伯説以下の傳を適宜に吸收し得る處である。

而して圖に對して直接解釋に役立つ記述は傳に見出されない。この意味で依然作品によつて確認せらるゝ藝術家であり、この五位鶯圖等は單庵の名を活かすべき重點となる。唯その相阿の弟子にして二十代の天死せる人として即ち相阿の同時代人たるを認むれば足利期末（一五〇〇年代前半）をその生存年代とな

(原 寸)

し得る。

かくして相阿との關係は重要視さるべくして、相阿の傳稱作品は數多く而もその代表作の設定に苦むとき、單庵の畫蹟上に於ける追究、即ち如何なる關係を相阿その他に對してもつかは殘された問題としたい。云ひ得るならば、單庵の沒骨風の水墨法、環境描寫より孤立して各個に凝集する傾ある形態感を有するなど相阿畫との共通な概念と想はせ、例へば雪舟畫の全般的な統り、平衡した力の感を以て象形を組上げる構圖に比すれば、明かに區別せらるべき型と認め得る。

この圖が左下りの土坡に開かれた天地に向ふ一羽の五位鶯を立て蘆葉を配する。蘆の鳥の體に懸るをば突如として筆を止め、脚下の土坡は描かずに白く抜く。この無雜作な按配は確かに好き個性的な味ひをもつ。即ち畫史の能用蘆筆と云ふ一種婆娑たる感に、鳥に配する環境の蕭條たるを説明して十分である。

殊に、五位鶯の形態は能く視られ能く感じて突込んで描出され、濃淡の墨掃の毛描に體のふくらみを盛上げ、羽根の文を焦墨を散らして點じその墨色はよく

浸入つて居る。焦墨を目、嘴、尾羽根、脚に點じそのべつとりした墨附きは全體の輪廓を締める。かくてその羽根に戦きを、その脚に靜止の安定を感じられ、重要な核心的な象形にその充分な効果を既に豫感して着筆し呵成の仕上げとの印象を感じられる。

かくて故中川先生の說かれし如く神泉苑の故事以來日本人に親しき此の鳥への愛惜が茲に一の明かな具象的な表現として成立して居る。支那畫にこの主題を見ず、鶯と區別して鳩鵲として我國特有と云ひ、我繪畫には同時代初に靈淵默菴あつて此の圖（近衛公藏品）を傳へる。それは條枝に止まり、描かれない魚を親ひ、圖中梵琦楚石贊、「水清魚見」と云ふにびつたりと一致する畫境であると云ふ。その鳥の寒風に洗はれながら、一點貪婪の性情に燃える姿を寫し、而もその筆裡に他の素因を清算してその性情を肯定し同情して視又描く處である。かくして觀照の一契機としての五位鶯は我が水墨畫に特殊な主題を與へてゐる。

此の單庵畫も之と同じく考へざるを得ない。迂滑に見過せば薄暗き天地に滲む一つの汚點しみの如く些やかな存在にすぎない五位鶯は決して支那畫の白鶯の如き美しさ故には描かれない。單庵にあつて無雜作に取扱はれた環境に五位鶯一羽を滲入る筆むしろ墨に現はしてその孤獨の性情に即した捉え方を成す。一旦に無雜作とした土坡、蘆葉もこの一個の鳥に焦點を形成する意味にその表現の強度の抑制するを肯せられる。土坡を脚下に白く抜き、蘆を中途に描き止めること、五位鶯の形自體に交渉を有たざる處に、延いてその孤獨の一層に孤獨としての感を深めやう。かくその性情に即して圖を成すは淵默菴以來の深い觀照であり、そは單にその主題を齊うするに止まらない。同じく日本に於ける水墨畫の發展の達し得た一つの極限的深さ、即ち畫面の構成とは別途に辿られた形象の捕捉に於ける夫を意味する。之がやゝ粗々しい筆致の下に而かも高き評價の故を茲に求められなければならない。

更にこの五位鶯が特に動きのない狀態にその根本的な素因を置く。而して動的な捕捉に多くの形態描寫の困難を超え來つた墨畫の手法の自由さは確かに之

に於てもその筆觸に内在的に含み多き味ひを醸すべきは推し得て、かくも示さざる事の稀れなるを思ひ、時代としての影響、畫家自身に於ける素質等特異な交錯の下にのみ此の畫在るを識る。繰返すまでもなく、些かなるものへの關心が、そは一朝に眺めやられて作上げられるものに非して、常住に感じつゝありしもの結果としてこの造形的な足跡を残す。之に伴ふ一種孤獨の感は禪宗文化に隨從し來るものながら、かく物に即して泌々と滲出す心情は僧ならずとして俗に住しても反省し味到せられる處であらう。かゝる表現のおそくに個性的に解せらるゝは、延いて一畫人として單庵を他より切離して明確な存在を主張するものであらう。之が大きな自由の感よりもかく閉された個性的な心情に即する故に或は足利期の主流の繪畫には遠きものなるを思ひ、かゝる畫の存在の忘却せられ易く、又時折の咏嘆に委せられ埋れやすきを思ひながら、猶ほ時代の一面面を物語るものとして又その深き玩味を要求するものである。(熊谷)

## 五、葛徵奇筆 水墨山水圖 東京 松岡於菴衛氏藏

綾本墨畫 掛幅 堅 四〇・三幅 横 八一・六幅

葛徵奇の畫は世に流傳するもの極めて乏しい、淺野梅堂の博覽を以てしてその漱芳閣書畫銘心錄に名を載せざるは固より、本國支那における著錄類を涉獵するも殆ど寥々晨星の觀がある、今葛徵奇といへば人は必ず岩崎男の所藏に係る溪陰鎖夏圖を想起する、然り彼一軸は唯一の徵奇畫であつて、そは恰も畫僧蘿窗が淺野家の一幅によつて傳はる如きものである、傳にいふ、徵奇名は無奇、介龜と號す、海寧の人、崇禎の進士、官光祿寺少卿に至り、告歸して湖山の間に放浪し、以て終る、蕪園詩集あり、間適の致あり、また善く山水を畫くと、斯人既に専門畫人に非ず、恐らく作る所もまた妙かつたのであらう。

頃日友人三成重敬君、山内容堂が嘗てその侍讀たりし土佐の學者故元老院議官松岡時敏に贈りしものとて容堂が例の山陽流もて箱に明葛徵奇水墨山水絹本の十字を書き付けたる一幀を携へ來つて、僕に示す。僕諦視數分始めて口を開

いて言ふ、此畫或は尋常鑑畫家者流以て葛徵奇畫とせざらんと計るべからず、岩崎男の彼畫に比するに風趣著しく相同じからざるものあれば也、然れどもその畫は斷じて俗士の能くすべき品彙匹儔にあらず、且や溪陰鎖夏圖と較ぶるに差別の裡平等の存するあり、疎樹門の如く相對するは其一、畫面の中心門樹の奥深く瀑布を落してその瀑布末に於て相分るゝは其二、この二つのものは恐らく葛氏の最も好む所にして、また實に餘家と類を異にして、徵奇畫を時流中に特立せしむる所以、題語の文字に至つても一見相距る遠きが如きも、例へば葛字と徵字と相結ぶあたりに痼癖の蔽ひ難きものあり、これ其三、思ふに彼は款識に崇禎甲戌七月の年紀あるに見るも壯年の作たること明かなるに反し、此は全く脂粉の香を脱却して枯淡の境に入れる老年の作なるのみ、暫く眞蹟を以て之を見做さんと欲すと。三敬君膝を打ちて、余も亦た然か思へりとして兩人相顧みて共に樂しむ。

思ふに斯畫の最も面白き點は草書の矢字なして落ち來る瀑布に在る、否、瀑布に對して一字横に架けたる石橋に在る、昔者藝阿彌は觀瀑僧を待つ一空屋を畫いてその構想の奇を謳はれたが、徵奇は一人の點景人物を容れず、畫に對する者をして擅まに畫中に入らんことを期待して居る、あゝ人待ち顔にも見ゆる石橋の面白さよ。用墨用筆の上より觀れば披麻皴に加へた焦墨の點苔が淡々しい畫面に能く活趣を與へて居ることを見逃すわけに行かない。畫は淡黃褐の紋綾の上に畫かれて居る、統本は明畫に多いが綾本なることが文人畫としてまた珍らしい風景を添へて居る。(協本)

## 六、七、日吉山王祭圖 京都 法林寺

四曲屏一雙 紙本着色 堅 一七〇・〇幅 横 三七四・八幅

慶長寛永を中心とする其の前後の風俗圖に諸社の祀祭の光景を圖するもの多く、其の最も代表的なものとしては、舊名古屋離宮障壁畫の一部、及び豐國神社藏豐國大明神臨時祭圖屏風等があるが、本圖も亦是等祀祭圖の類品の一とし